

## マーガレット・テイラーの版画集

### 『アマストからカシミールへ

### —エミリ・ディキンソン詩選—』のための解説

武 田 雅 子

[これは、マーガレット・テイラーの版画集『アマストからカシミールへ—エミリ・ディキンソン詩選—』（アマスト、マサチューセッツ、ティアマット・プレス社、1986 年刊）の翻訳および解説である。]

版画集に付けられたカタログには製作について次のように記されている。

マーガレット・テイラーは、詩のためのスケッチと水彩画を 1983 年の夏から始めた。エッチングのための色の試し刷りは 1984 年と 1985 年になされた。版画は、画家本人のアマストのスタジオで 1986 年と 1987 年に本人によって印刷された。一つ一つの版画は、ハーネミュール・エッチング紙に 4 枚の別々のプレートから印刷されたものである。ブックデザインはボストンのアードーラム工房のブルース・チャンドラーによる。テキストはニューヨークのスキヤネアトレスのマイケルおよびウィニフレッド・ビックスラーによりモノタイプのヴァン・ダイク型にステロ取りされ、印刷はハードレイのワイルド・キャロット・レタープレス社のダニエル・ケレハーが行なった。製本はデイヴィッド・ボアボーによるデザインで、絹の布表紙は、マサチューセッツ州イーストハンプトンのシスル製本で、ダニエル・ゲーンリッチより描かれた。この版は全部で 50 部作成され、版画家本人がサインし、番号を振っている。

同じくカタログに収録された批評は、次のようなものである。

「エミリ・ディキンソンの詩は複雑かつ単純なため、その詩を絵画で表現しようとする  
と恐ろしく難しい挑戦となる。マーガレット・テイラーは、その作業に必要な大胆さ、深  
さ、それに技巧を備えている。彼女のエッチングは、ディキンソンの言葉によって始めら  
れた精神的な探求を、視覚的に敷衍したものである。そして、そうすることによって、詩  
の言葉に、それにふさわしい名誉を与えているのである。」 —— デチャード・ターナー

テキサス大学オースティン校ハリー・ランサム人文研究所所長

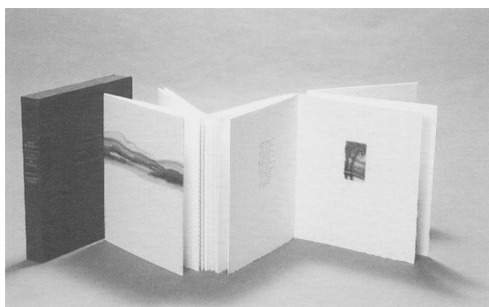
「マーガレット・テイラーのエッチングはエミリ・ディキンソンの詩の連のように簡潔で、

また詩と同様、我々のなじみのアマストの光——ディキンソンに言わせると「ほとんど話しかけんばかり」のあの光——に満ちて緊張感がある。」——ディヴィッド・ポーター  
『ディキンソン——現代的語法』の著者

「この書は、本の製作者でもある版画家が、自分に課した莫大な要求を見事に満たしている。その課題とは、エミリ・ディキンソンの詩に対して、本当の意味でふさわしい画をつけるということである。その結果、豪華なものが出来上がった。私はことに『消える軌道』のハチドリの絵がすばらしいと思う。」——エヴァレット・エマスン  
ノース・カロライナ大学チャペル・ヒル校英米研究教授

『アマストからカシミールへ』の出版は、ディキンソン没後百年記念の一大芸術事業である。」——ダニエル・ロンバルド  
アマスト町立ジョーンズ図書館特別コレクション・キュレーター

## 写真と説明



イーストハンプトンのシスル製本の  
デイヴィッド・ポアボーによるデザイン。  
綴じ方は中国・日本の折り畳み本式。  
絹製本の函入り。



エッチングの一つにインク入れをする、  
アマストのスタジオにおけるマーガレット・  
テイラー。



シスル製本のダニエル・ゲーンリッチ。  
マーガレット・テイラーの水彩画を基にして  
製本のカバーとなる絹に絵を描く。

この版画集のタイトルは次の詩の3行目から採られている。

J-179

If I could bribe them by a Rose  
I'd bring them every flower that grows  
From Amherst to Cashmere!  
I would not stop for night, or storm -  
Or frost, or death, or anyone -  
My business were so dear!

If they would linger for a Bird  
My Tambourin were soonest heard  
Among the April Woods!  
Unwearied, all the summer long,  
Only to break in wilder song  
When Winter shook the boughs!

What if they hear me!  
Who shall say  
That such an importunity  
May not at last avail?  
That, weary of this Beggar's face -  
They may not finally say, Yes -  
To drive her from the Hall?

次の詩がプロローグとして置かれ、これには版画は付されていない。

*Noon - is the Hinge of Day -  
Evening - the Tissue Door -  
Morning - the East compelling the sill  
Till all the World is ajar -*

もしバラで皆を買収できるなら  
一本残らず持ってこよう  
アマストからカシミールに咲くどの花も！  
夜が来ても嵐でも止めはしない  
霜でも死でも誰が来ても—  
私の仕事はそんなにも大切！

鳥一羽で 皆がとどまってくれるなら  
私のタンバリンの音を 四月の森の中で  
すぐにも聞かせてもいい  
疲れも知らず 一夏中鳴らし  
さらにもっと激しく歌うとすれば  
冬が木の枝を揺るときだけ！

もし皆が私の歌を聞いたらどうだろう！  
こんなにしつこくても  
どうせ無駄だなんて  
誰が言うだろう？  
この乞食の顔に飽きて  
玄関から追い払うために  
ついには「よし」と言うことはないなんて 誰が言うだろう？

カシミール：インド・パキスタン北部。カシミヤ毛織物の産地として知られる。

J-931

正午は一日の蝶番  
夕方は薄絹のドア  
朝は東が敷居をこじあけて  
全世界が少しだけ開いたもの

第 1 作

J-1250

White as an Indian Pipe  
Red as a Cardinal Flower  
Fabulous as a Moon at Noon  
February Hour -



第 2 作

J-812

A Light exists in Spring  
Not present on the Year  
At any other period -  
When March is scarcely here



A Color stands abroad  
On Solitary Fields  
That Science cannot overtake  
But Human Nature feels.

It waits upon the Lawn,  
It shows the furthest Tree  
Upon the furthest Slope you know  
It almost speaks to you.

Then as Horizons step  
Or Noons report away  
Without the Formula of sound  
It passes and we stay -

A quality of loss  
Affecting our Content  
As Trade had suddenly encroached  
Upon a Sacrament.

インディアン・パイプ

銀 竜 草のように白く

カーディナル・フラワー

紅花沢桔梗（べにばなさわぎきょう）のように赤く

お昼の月のようにお伽話めいている

二月の時間は一

春にはこんな光がある  
一年の他の時期には  
現れないが一  
ようやく3月になろうかという頃

一つの色が  
物寂しい野原のあちこちに浮かぶ  
それは科学では追いつけないが  
人の本性は感じるもの

それは 芝につきもの  
それは 知る限り遥か遠くの坂の  
遥か遠くの木も見せる  
それは こちらに話しかけんばかり

それから 地平線が歩み  
正午が報告し終わると  
音の公式も使わずに  
光は消え 私たちを置き去りにする

喪失感が  
私たちの内面を襲う  
ちょうど 商いが突然  
聖餐式に侵入したかのように一

第3作

J-1235

Like Rain it sounded till it curved  
And then I knew 'twas Wind -  
It walked as wet as any Wave  
But swept as dry as sand -  
When it had pushed itself away  
To some remotest Plain  
A coming as of Hosts was heard  
That was indeed the Rain -  
It filled the Wells, it pleased the Pools  
It warbled in the Road -  
It pulled the spigot from the Hills  
And let the Floods abroad -  
It loosened acres, lifted seas  
The sites of Centres stirred  
Then like Elijah rode away  
Upon a Wheel of Cloud.



第4作 (おもて 表の最後として)

J-1463

A Route of Evanescence  
With a revolving Wheel -  
A Resonance of Emerald -  
A Rush of Cochineal -  
And every Blossom on the Bush  
Adjusts its tumbled Head -  
The mail from Tunis, probably.  
An easy Morning's Ride -



雨のような音だったが 曲線を描いたので  
それで 私はそれが風と知った  
歩くと波のように濡れていた  
しかし吹き去ると砂のように乾いていた  
限りなく遥か遠い平原へと  
それが去っていったとき—  
軍団の来襲のような音が聞こえ  
そのときはまったく雨そのもの  
井戸を満たし 水溜りを喜ばせ  
道で囁った  
それは丘から栓を引き抜いて  
洪水を溢れさせた  
それは地所を解き放ち 海を持ち上げ  
芯軸のありかを揺るがせ  
預言者エリヤのごとく去って行った  
雲の車輪に乗って—

エリヤ：[旧約、列王記下2章] つむじ風に乗って天に昇った

回転する車輪を持った  
消える軌道  
エメラルド色の反響  
鮮紅色の突進  
茂みのどの花も  
髪振り乱した頭を整える  
おそらく遥かなチュニスからの郵便馬車  
楽しい朝の遠乗り  
ハチドリを描いたもの



第 5 作

J-122

A something in a summer's Day  
As slow her flambeaux burn away  
Which solemnizes me.

A something in a summer's noon -  
A depth - an Azure - a perfume -  
Transcending ecstasy.

And still within a summer's night  
A something so transporting bright  
I clap my hands to see -

Then veil my too inspecting face  
Lest such a subtle - shimmering grace  
Flutter too far for me -

The wizard fingers never rest -  
The purple brook within the breast  
Still chafes its narrow bed -

Still rears the East her amber Flag -  
Guides till the Sun along the Crag  
His Caravan of Red -

So looking on - the night - the morn  
Conclude the wonder gay -  
And I meet, coming thro' the dews  
Another summer's Day!



夏のある日の何かが  
ゆっくりと自分の松明を燃やし  
私を厳粛にする

夏の正午の何かは  
恍惚をしのぐ  
深さ 紺碧 香水

しかもなお夏の夜には  
うっとりするほど輝やかな何かを見ると  
私は拍手する

それから 私の詮索好きな顔を覆う  
このようなかそけきゆらめく美しさは  
私にとってあまりに遠くに羽ばたいていきはしまいかと

魔法使いの指は決して休まず  
胸の内の紫色の小川は  
静かにその狭い川床をこすって流れる

静かに東は自分の琥珀色の旗を掲げる  
太陽は静かに切り立つ岩に沿って  
自分の赤い隊商の道案内をする

かくして 昼と朝が  
華やかな驚異を締めくくるのを見て  
私は出会う一露を通してやってくる  
新たな夏の一日と！

第 6 作

J-916

His Feet are shod with Gauze -  
His Helmet, is of Gold,  
His Breast, a Single Onyx  
With Chrysophrase, inlaid.

His Labor is a Chant -  
His Idleness - a Tune -  
Oh, for a Bee's experience  
Of Clovers, and of Noon!



第 7 作

J-656

The name - of it - is "Autumn" -  
The hue - of it - is Blood -  
An Artery - upon the Hill -  
A Vein - along the Road -

Great Globules - in the Alleys -  
And Oh, the Shower of Stain -  
When Winds - upset the Basin -  
And spill the Scarlet Rain -

It sprinkles Bonnets - far below -  
It gathers ruddy Pools -  
Then - eddies like a Rose - away -  
Upon Vermilion Wheels -



足には紗の靴を履き  
冑は黄金製  
胸は緑玉髓の象嵌細工をした  
一個の縞瑪瑙

仕事といえば歌うこと  
怠けても曲になる  
あゝクローバーと正午に関する  
蜜蜂の経験があれば！

その名は「秋」  
その色は血の色  
丘の上には動脈  
道沿いには静脈

小道には大きな血球  
あゝそれから染料の夕立  
風が水盤をひっくり返し  
緋色の雨をこぼすときー

それは遥か下の帽子に水を撒き  
赤い水溜りを集め  
それからバラのように渦巻いて去っていく  
朱の馬車に乗ってー

第 8 作

J-130

These are the days when Birds come back -  
A very few - a Bird of two -  
To take a backward look.

These are the days when skies resume  
The old - old sophistries of June -  
A blue and gold mistake.

Oh fraud that cannot cheat the Bee -  
Almost thy plausibility  
Induces my belief,

Till ranks of seeds their witness bear -  
And softly thro' the altered air  
Hurries a timid leaf.

Oh Sacrament of summer days,  
Oh Last Communion in the Haze -  
Permit a child to join.

Thy sacred emblems to partake -  
Thy consecrated bread to take  
And thine immortal wine!



今はこんな日々―鳥が  
ほんの数羽―一羽か二羽戻ってくるとき  
振り返ってうしろを見るために―

今はこんな日々―空が  
六月のあの昔々の詭弁を身にまとうとき  
青と黄金の織り成す間違いを―

あゝ蜜蜂をだませない欺瞞よ  
あまりにもっともらしく  
私はあわや信じかけがほどだが―

しかしついには種の列が証拠となり  
改変した空気の中をそっと  
ためらいがちに葉が一枚急いで落ちる

あゝ夏の日々の秘蹟よ  
あゝ霞に包まれた最後の聖餐よ  
一人の子供が加わるのをお許してください

汝の聖なるしるしに与<sup>あず</sup>かれますように  
汝の清められたパンと  
汝の不滅のワインをいただけますように  
秋に夏を思わせる小春日和が来ることを歌う

第9作

J-1075

The Sky is low - the Clouds are mean.  
A Traveling Flake of Snow  
Across a Barn or through a Rut  
Debates if it will go -

A Narrow Wind complains all Day  
How some one treated him  
Nature, like Us is sometimes caught  
Without her Diadem.



第10作

J-228

Blazing in Gold and quenching in Purple  
Leaping like Leopard to the Sky  
Then at the feet of the old Horizon  
Laying her spotted Face to die  
Stooping as low as the Otter's Window  
Touching the Roof and tinting the Barn  
Kissing her Bonnet to the Meadow  
And the Juggler of Day is gone



次の詩がエピローグとして置かれ、これにもプロローグと同様、画は付されていない。

*Soft as the massacre of Suns*

*By Evening's Sabres slain*

空は低く 雲は不機嫌  
旅する雪の一片が  
農場を横切り わだちを越えて  
行くべきかどうか考える

偏屈な風が一日中不平を言う  
誰かさんの扱いがどうのこうのとー  
自然は私たちと同じで 時として  
王冠を脱いだ姿を見せる

金色に輝き 紫に沈んで  
空に豹のように跳ね上がる  
それから 昔ながらの地平線の足元に  
消えなんとして まだらの顔を置き  
川瀬の窓まで低く屈んで  
屋根に触れ 納屋を染め  
野原に向かって 自分の帽子にキスをして挨拶し  
こうして 日の魔術師は行ってしまふ

J-1127

夕べのサーベルで殺された  
日々の太陽の大虐殺のようにそっと



エッチングに描かれた風景の所在地

第1作 「銀竜草のように白く」

アマスト・ロードより西を見てレヴェレットを望む風景。

第2作 「春にはこんな光がある」

アマスト大学のグラウンドの上のペラムの丘。

第3作 「雨のような音だったが」

ノースハンプトンからアマストの道で南西方向に見た風景。

第4作 「消える軌道」

アマストへの夏の正午の訪問者。

第5作 「夏のある日の何かが」

ノースハンプトン近郊ハドレイの野原から見た風景、  
ホリヨークの連山が右で彼方にアマスト。

第6作 「足には紗の靴を履き」

アマストの北の森の蜜蜂と紫色のキク科コーンフラワー。

第7作 「その名は『秋』」

アマストから望むペラムの丘。

第8作 「今はこんな日々——鳥が」

アマストの西の野原から西を見る。

第9作 「空は低く 雲は不機嫌」

エミリ・ディキンソンの家から見るノーウォッタック山の風景。

第10作 「金色に輝き 紫に沈んで」

アマストから西を見る。

[この本の制作中に、マーガレット・テイラーはその製作過程を披露する展覧会をアマストの町の図書館で開いた。そのことが新聞記事（デイリー・ハンプシャー・ガゼット紙、1985年5月15日付）に取り上げられたので、その訳も次に付記する。]

エミリ・ディキンソンを深く見つめて

—— マーガレット・テイラーは辛抱強く小さなエッチングで詩に絵をつける

パトリシア・ライト記

エミリ・ディキンソンは自らを駆り立てるようにして書くということが非常に顕著な詩人であって、1862年のことだが、1年間に366篇の詩を書いたことがあった。彼女は誰かが注目してくれると思って詩を書いたのではなかった。書いたのは自分自身と未来のために、ほとんど出版されることのなかった作品を手製の小冊子の形で残したのだった。

この19世紀のアマストの詩人の静かながら確固たるあり方と、あるアマストの芸術家のスタジオで現在進行中の、ディキンソンの影響を受けて始められた静かながら確固たるプロジェクトとの間には、似たところがあると筆者には思われる。

マーガレット・テイラーは、エミリ・ディキンソンの色と風景の心象に基づいた版画の連作にここ2年間携わっている。この2年というのは、歩き、見つめ、スケッチし、下絵を描き、試し刷りをしてまたやり直すといった歳月で、これからさらに1年半以上かかることになっている。もし万事うまくいけば、その暁には、このすべての成果として、10枚の小さなカラーエッチングがディキンソンの詩とともに豪華限定50部の本として出版される。

エミリ・ディキンソンが人々の眼から身を隠していたということは有名だが、マーガレット・テイラーは人に知られる前にこのプロジェクトに1年間取り組んできたとはいえ、別にディキンソンと張り合うわけではない。去年彼女はアマスト芸術評議会に本の発刊のための資金を申し込み、授与が認められた。「本の出来るまで」と題する小展示も企画し、これは現在ジョーンズ図書館の廊下のケースで見られる。さらに、5月の毎日曜日にはスタジオを公開して、作品を見たい人々に供している。

しかし、マーガレット・テイラーが勇敢にも取り掛かっていることは、筆者が思うに、その時間と才能が必要とされる割には、見合うほど注目されることがほとんどありえないプロジェクトであると言えよう。もちろんこれはどんな芸術作品にも言えることではあり、そう思うと、次に誰かの絵の前を急いで通り過ぎるときに、ちょっと立ち止まらずにはおれない気になる。しかし、このようなプロジェクトの場合、特にそれは顕著である。

版画は先にも述べたように小さくて、ほんの約2×3インチ四方というところである。これらはマットをつけ、額縁に入れて壁に掛けるために創作されるものではなく、本の中に入れ込むためのものである——絹の布表紙で、ヨーロッパの紙に手描きの絵が添えられる。しかし、この本はそれでも複数の人間がかかわっていて、手でなされる共同の作業の過程を経て出来る作品である。(ボストンのヘロン印刷社のデザイナーであるブルース・チャンドラー、ハドレイのワイルド・キャロット印刷社のダン・ケレハー、イーストハンプトンのシスル製本の製本係りであるディヴィッド・ボアボーがマーガレット・テイラーに協力している。)

それから、そう、これらの作品はエッチングである。私のお気に入りの芸術作品の中にはエッチングも含まれるとはいえ、すべて版画類は悲しいかな、一段下の扱いを受けている。数年前、

マーガレット・テイラーがボストンで見たピサロの展覧会のカタログに、彼女のお気に入りの言葉があるのだが、それによると、このフランスの印象派の画家は、自分の版画が絵画よりも当然のごとく低く見られるので苛々すると言っている。

マーガレット・テイラーがカミーユ・ピサロのことを考えている——と考えるのは楽しい。というのも、それは彼女の作品を理解する鍵だから。「彼が光を自分のエッチングの中にとらえようとした方法に、私は影響を受けました」と彼女は語った。ピサロの影響は彼女のスケッチブックの中に認められ、何頁かは現在開催中の展覧会で見ることができる。それは、彩色のスケッチで、絵のぐるっと周りには注や相互参照のマークや追加が書き込まれていて、真剣で長い時間をかけてこの土地の風景の色と光の交錯を観察した記録となっている。

この見つめて見つめぬくということ——例えばエミリ・ディキンソンが「夏の正午の何かは／深さ 紺碧 香水」という詩行で何を言おうとしたかを見るために見つめるということは、おそらくマーガレット・テイラーに写真でもきらっと光るすばらしい鋭い眼を与えたものであろう。それはまたおそらくそれ自身報われてもいる。時間を割き展覧会を見に来て、彼女の経験をともに味わった人々は、自分たちもまた報われたと感じるだろう。

『アマストからカシミールへ』のタイトルはディキンソンの詩から採られているが、この本の完成は1986年の12月に予定されている。これはエミリ・ディキンソンの誕生月であり、この年は彼女の没後百年に当たっている。展覧会「本の出来るまで」はアマストのジョーンズ図書館で5月中開催。画家のスタジオの日曜訪問の名前を記入するための用紙も備えられている。

#### [Notes]

\* エミリ・ディキンソンの詩は、フランクリン番号またはジョンソン番号で特定するが、この書の出版時には、まだフランクリン版のディキンソン全詩集は出ていなかったもので、後者を採用し、次の書から引用した。

*The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols., ed. Thomas H. Johnson (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1955).

\* この版画集の日本での販売に関して、当時の日本エミリ・ディキンソン協会会長の山川瑞明氏が推薦文を残されているので、参考にさせていただいた。なお、ここではタイトルは『アマストからカシミヤへ』となっている。同氏は、この版画集について「エミリ・ディキンソンと絵画—テイラーのエッチング連作を巡って」(『英文学論叢』京都女子大学英文学会刊、1988)を発表されている。

— ○ —

\* この稿は、2004年に、この版画集が大阪樟蔭女子大学図書館に寄贈されるに当たって作成したものである。

\* Special thanks to Ms. Margaret Taylor for her following message: Masako Takeda has my permissions to translate and print the prospectus for “From Amherst to Cashmere” as well as to photograph and print my image for the poems in that book. — Margaret Taylor, 2004.